

東京大学大学院工学系研究科 幾原 雄一教授が

フンボルト賞を受賞（2011年3月24日に授賞式）

ドイツのアレキサンダー・フォン・フンボルト財団は、本年度のフンボルト賞を、幾原雄一東京大学大学院工学系研究科教授（51歳）（財）ファインセラミックスセンター・ナノ構造研究所 主管研究員兼務、東北大学原子分子科学高等研究機構教授兼務）に贈ることを発表した。同賞は、ドイツ政府の国際的学術活動機関であるアレキサンダー・フォン・フンボルト財団が創設した賞である。人文、社会、理、工、医、農学の各分野において、基本的な発見もしくは新しい理論によって後世に残る重要な業績を挙げ、今後も学問の最先端で活躍すると期待される国際的に著名な研究者に対して授与されるもので、本賞に加えて約700万円の賞金とドイツでの滞在費用が支給される。本学では、2002年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊栄誉教授(98年)や、元東大総長の有馬朗人名誉教授、数学者の小林俊行教授などが過去に受賞しており、これまでの受賞者のうち43名がノーベル賞を受賞しているドイツの最も栄誉のある賞とされている。幾原教授は材料科学分野での受賞で、本分野における日本人としては3人目の受賞者となった。授賞式は2011年3月24日ー27日にドイツにおいて行われ、同6月にはドイツ大統領官邸ベルビュー宮殿で大統領主催のレセプションに招待されている。

今回の受賞の対象となった研究は、「材料界面の超微細構造と物性に関する研究」であり、材料科学の分野に大きなブレークスルーを与えたことが評価された。幾原教授は、最先端透過電子顕微鏡法を駆使し、セラミック材料の界面の原子・電子構造を解明するとともに、これらの超微細構造を制御した新しい機能材料を創出した。さらに同氏は、球面収差補正-走査透過電子顕微鏡法と第一原理計算を融合した新解析手法を独自に開発し、これまで不明であった多くの材料現象を一気に解明することに成功した。特に、ドーパント元素の直視を可能とした研究や界面構造制御型機能材料の設計を行った成果は、最近のサイエンス誌やネイチャー誌においても多数掲載され、国際的に極めて高い評価を受けている。一方、その成果は産業界からも大いに注目され、2007年に中部経済連合会が主導して発足した財団法人ファインセラミックスセンターナノ構造研究所（名古屋市）設立のための大きな原動力ともなった。また現在、文部科学省の特定領域研究“機能元素のナノ材料科学”の領域代表として日本の材料研究を牽引している。これまでの研究成果は約450編の論文で発表するとともに、ゴードン会議など関連の国際会議において100件を超える招待・基調講演を行っている。

問い合わせ先：

東京大学大学院工学系研究科

教授 幾原雄一

〒113-8656 東京都文京区弥生2-11-16(工学部9号館)

HP <http://interface.t.u-tokyo.ac.jp>

フンボルト賞受賞者

幾原 雄 一 博 士 の 略 歴 等

1. 受賞者役職：

東京大学大学院工学系研究科総合研究機構教授
(財) ファインセラミックスセンター・ナノ構造研究所 主管研究員(兼務)
東北大学原子分子科学高等研究機構教授 (兼務)



2. 受賞の対象となった研究：

「材料界面の超微細構造と物性に関する研究」

3. 略 歴：

- 1988年 3月 九州大学大学院総合理工学研究科博士課程修了
(工学博士)
- 1988年 7月 財団法人ファインセラミックスセンター
試験研究所入所 (研究員)
- 1996年 7月 東京大学大学院工学研究科材料学専攻助教授
- 2003年 1月 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構教授
- 2005年 4月 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構長
- 2008年 4月 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構
ナノ工学研究センター長